芥川龍之介「上海游記」論

——「私」が見た「新しい」上海——

周 芷 冰

一

芥川龍之介は、大阪毎日新聞社の海外特派員として、大正十年三月下旬から七月中旬までの約四カ月間、中国に渡った。東京から出発し、上海、杭州、蘇州、南京、長沙などの都市を経て北京に到着した。そして、北京から天津、奉天、朝鮮を経て、七月二十日に帰国した。ただし、新聞社との、旅行中に紀行文執筆に取り掛かるという当初の約束と違い、旅行記はすべて帰国してから書かれたのである。旅行の成果としての『支那游記』は「上海游記」、「江南游記」、「長江游記」、「北京日記抄」、「雑信一束」の五つの部分からなっている。今回研究対象とする「上海游記」は大正十年八月十七日から九月十二日まで二十一回にわたって『大阪毎日新聞』に、また八月二十日から九月十四日まで『東京日日新聞』に掲載されている。

芥川の中国旅行に対して大阪毎日新聞社は大いに期待している。彼が上海に上陸した直後、三月三十一日の『大阪毎日新聞』は朝刊に「支那印象記 芥川龍之介氏 新人の眼に映じた新しき支那 近日の紙上より掲載の筈」という新聞記事を掲載している。その予告記事は次のように書いている。

支那は世界の謎として最も興味の深い国である。旧き支那が老樹の如く横はつて居る側に、新しき支那は嫩草の如く伸びんとして居る。政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那固有の文化が新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある。(略)吾が社はこゝに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那印象記』を掲載する。⁽¹⁾

この予告記事から見ると、新聞社が求めているのは、「有ゆる方面に支那固有の文化が新世界の夫と相交錯する所」である。すなわち、「新しき」中国の様子を描く紀行文ということである。

芥川自身も書簡に「僕も支那へ行きたいんだが銀相場は上つてゐるし金は更になし行きたいだけで暮してゐるその点で君などは大に羨しいよ一体上海ぢや一月いくらで暮せるだらう安ければ僕も一月位行つてゐたい」⁽²⁾、「君の支那旅行の経費算用の綿密なものには敬服したなる可く都合して一しよに行き給へボクも貧乏旅行をする心算だから」⁽³⁾と書いているように、以前から古典文学に深い関心を持つ芥川にとつて、中国旅行が長年の夢だったのである。中国旅行直前の当時大阪毎日新聞社の文芸部長である薄田泣菫宛書簡の中に、「一昨日精養軒の送別会席上にて里見弴講演して曰『支那人は昔偉かつたその偉い支那人が今急に偉くなくなるといふことはどうしても考へられぬ支那へ行つたら昔の支那の偉大ばかり見ずに今の支那の偉大もさがして来給へ』と私もその心算であるのです」⁽⁴⁾と書いているように、芥川は自分自身の目で現実の中国を確認しようとしながら、新しい中国をも発見しようとしている。

このように芥川は中国滞在中常にメモを取っている。大正十年六月二日付薄田泣菫宛の書簡では「しかも目に見る所、耳に聞く所、忘却し去るを恐るゝが故に、街頭にあると茶楼にあるとを問はず直に手帖を出してノオトを取る」⁽⁵⁾と書いている。その多くの記載が『支那游記』群の素材となっている。現在では岩波書店から出版された『芥川龍之介全集』第二十三巻に「手帳六」と「手帳七」として収録されている。

林颯君氏はこの二冊の手帳に注目し、「作品に描かれるエピソードは、ある構成意識のもとに改変され、配列され

ていることが分かる。その意味で『上海遊記』は、中国での見聞を紹介・報告するものではなく、一つの創作として書かれたものだ⁽⁶⁾と指摘している。林氏の述べるように、「上海遊記」は一見すると、上海に上陸してから離れるまで芥川自身の見聞、体験を綴ったものであるが、「劇台」や「南国の美人」などの章は配列を逆転させている。また、メモを利用しながら、省略や改変を行ったことがよく見られる。政治家との会見記においても、リライトされた箇所がある。例えば、鄭孝胥との会見についてメモには「老爺が火をすりくるる小説の話」や「世界戦争後の改造文学の超国家性」⁽⁷⁾と書いているが、遊記の中で鄭孝胥と討論したのは「小説」でもなく、「改造文学」でもなく、政治の話に改変されている。

また、秦剛氏もこの中国遊記の文芸作品としての一面に注目し、「上海遊記」をはじめ、一連の遊記は「しつかりした咀嚼と反芻の過程を経て執筆されたものであり、しかも表現上に様々な工夫が施された『紀行文』」⁽⁸⁾だと指摘している。林、秦両氏の言うように、「上海遊記」は上海での見聞をそのまま叙述した印象記ではなく、帰国後の芥川が反芻しつづ思考した上で執筆した紀行文であろう。

芥川は自分自身の「ジャーナリスト」的な才能を發揮し、その理的な目で上海を鋭く観察し、そして「上海遊記」を一つの文芸作品として創作しようとしていた。本論では、文芸作品としての「上海遊記」において、主人公の「私」と「私」の上海認識の変化を通して、芥川はどのように「新しい上海」を描いたのかを考察してみたいのである。

二

上海に上陸した「私」は埠頭に出てすぐ「何十人とも知れない車屋」に包囲された。「私」は日本の車屋と比べ、

「処が支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない。その上ざつと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしてゐる。それが前後左右べた一面に、いろいろな首をさし伸しては、大声に何か喚き立てるのだから、上陸したての日本婦人などは、少からず不気味に感ずるらしい」と上海の車屋を「不潔」、「怪しげ」な群衆として見てゐる。しかし、アスファルトの道に、「世界的な群衆は、赤いタバアンをまきつけた印度人の巡査が相図をすると、ちやんと馬車の路を譲つてくれる。(略)到底東京や大阪などの日本の都会の及ぶ所ぢやない」と上海の交通整理の行き届くことを見ている「私」は「だんだん愉快な心もち」になつてゐる。その夜、食事を済ませた「私」は、租界にある賑やかな四馬路を散歩している。喉が渴いた「私」は友人のジョンズと一緒にあるカツフェに入り、「だらしない舞踏を続けてゐる」イギリスの水兵たちとバラを売る婆さんを見かけてゐる。

カツフェのまん中には、英吉利の水兵が三四人、頬紅の濃い女たちを相手に、だらしない舞踏を続けてゐる。最後に入口の硝子戸の側には、薔薇の花を売る支那の婆さんが、私に不要を食はされた後、ぼんやり舞踏を眺めてゐる。私は何だか画入新聞の挿画でも見るやうな心もちになつた。画の題は勿論「上海」である。

イギリス水兵の背後にある西洋列強の中国進出を感じ取つていない「私」は傍観者のように水兵たちと婆さんを眺め、「画入新聞の挿画でも見るやうな心もち」になつてゐる。しかし、水兵たちの暴行を見た後、「私」は市民生活にも多く取材した十九世紀のフランス風刺版画家ドーミエの画を思い出している。婆さんに少し同情しただろうが、お金を貰つた上で「また我の財布の口を開けさせる」婆さんについて、「私はこんな欲張りに売られる、美しい薔薇が気の毒になつた」と思い始める。先ほどドーミエの画を想起した「私」は「この図図しい婆さんと、昼間乗つた馬車の馭者と、——これは何も上海の第一瞥に限つた事ぢやない。残念ながら同時に又、確に支那の第一瞥であつたと考へてゐる。

上陸した当初の「私」は西洋文明や西洋化を基準として、日本と比べながら上海を見つめてゐるだろう。傍観者の

ような「私」は文明の側に立って、「不潔」な、「怪しげな人相」をしている車夫や、「凶凶しい」婆さんを文明的に遅れている非文明人として見下している。

上海に着いた翌日から「私」は病気で床に就き、乾性肋膜炎の診断で、上海の日本人経営の病院、里見病院に入院することとなる。退院した後、「私」はさっそく上海の町の見物に出かけ、豫園の近くにある商店街を通して、「噂に聞き及んだ湖心亭」を見ている。

湖心亭と云へば立派らしいが、実は今にも壊れ兼ねない、荒廢を極めた茶館である。その上亭外の池を見ても、まつ蒼な水どろろが浮んでゐるから、水の色などは殆見えない。(略) 浅葱木綿の服を着た、辮子の長い支那人が一人、(略) 悠悠と池へ小便をしてゐた。陳樹藩が叛旗を翻さうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英統盟が持ち上らうが、そんな事は全然この男には、問題にならないのに相違ない。(略) これは憂鬱愛すべき風景画たるばかりぢやない。同時に又わが老大国の、辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿に、しみじみと少時眺め入つた。

評判と異なる湖心亭の風景に失望し、また、この風景を破壊した世界の情勢に無関心な中国人の姿を「老大国の、辛辣恐るべき象徴」だと非難している。異国情緒を味わうどころか、「出たらめな詠歎などに耽るものぢやない」と嘆いている。その後、「私」は「画端書でも御馴染の、名高い城内の城隍廟」を案内される。城隍廟の風景を見ながら、『聊齋志異』や『新齊諧』などの怪奇小説を想起し、「何時までも其処を離れなかつた」「私」は、一方で古典詩文から得たロマンに溢れる中国像、つまり「詩文にあるやうな支那」の不在に大失望を感じている。上海城内を見物した後、「私」はその感想を次のように記している。

金瓶梅の陳敬濟、品花宝鑑の谿十一、——これだけ人の多い中には、さう云ふ豪傑もゐさうである。しかし杜甫
だとか、岳飛だとか、王陽明だとか、諸葛亮だとかは、葉にしたくもゐさうぢやない。言ひ換へれば現代の支那

なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な、残酷な、食意地の張つた、小説にあるやうな支那である。瀬戸物の亭だの、睡蓮だの、刺繡の鳥だのを有難がつた、安物のモック・オリエンタリズムは、西洋でも追ひ追ひ流行らなくなつた。文章軌範や唐詩選の外に、支那あるを知らない漢学趣味は、日本でも好い加減に消滅するが好い。(傍線 引用者)

「私」は、世界の情勢に無関心な中国人や、「猥褻な、残酷な、食意地の張つた、小説にあるやうな支那」を見た後、この「老大国」への失望の情を隠さずに述べている。

古典文学や書画で中国を知つた芥川は、常に現実の中国に文学の中の中国を見出そうとしている。つまり、彼は文学によつて構築された「中国」と現実の「中国」、その両者の接点を通して、「中国」そのものを理解しようとしている。かつて古典文学に魅了された芥川は、「詩文にあるやうな支那」の不在に強いショックを受けている。そして、現実の「中国」を見つめる彼は、『文章軌範』や『唐詩選』などの古典書籍上の中国しか知らない浅薄な中国趣味を持つ日本人をも非難している。

しかし、西洋文明や西洋化を基準として、また昔読んだ古典文学と結びつけて中国を理解しようとしていた「私」はその後、何人かの政治家と会談を行い、上海を別の「目」で観察することによつて、「私」の上海認識も変化していく。

二二

上海滞在中、芥川は何人かの中国人政治家や文人と会っている。「上海游記」には、章炳麟、鄭孝胥、李人傑の三人の会見記が記録されている。関口安義氏は、「上海で三人の文人政治家に会い、中国をめぐるさまざまな政治的議

論を戦わせたことは、龍之介の帰国後の精神生活に強い影響を及ぼすこととなる」⁽⁹⁾と指摘しているように、「上海游記」におけるこの三人の会見記は極めて重要な部分だと思われる。ここで、芥川が如何に中国人の政治家とその論説を描いているのかを見てみたいのである。最初に書かれているのは「自ら王者の師を以て任じてゐる」章炳麟である。章炳麟は、孫文、黄興とともに「革命の三尊」と称された清朝末期の学者、革命家である。一九〇三（明治三十六）年、章は「康有為を駁して革命を論ずる書」を『蘇報』に発表している。彼は立憲君主制を提唱する康有為らの主張に反論し、下からの革命の道を理想としている。その後、弾圧されて、三年間北京に監禁されている。このような章炳麟が「上海游記」には次のように書かれている。

氏の話題は徹頭徹尾、現代の支那を中心とした政治や社会の問題だつた。（略）現代の支那は遺憾ながら、政治的には墮落してゐる。不正が公行してゐる事も、或は清朝の末年よりも、一層夥しいと云へるかも知れない。学問芸術の方面になれば、猶更沈滞は甚しいやうである。しかし支那の国民は、元來極端に趨る事をしない。この特性が存する限り、支那の赤化は不可能である。成程一部の学生は、労農主義を歓迎した。が、学生は即ち国民ではない。彼等さへ一度は赤化しても必ず何時かはその主張を抛つ時が来るであらう。何故と云へば国民性は、——中庸を愛する国民性は、一時の感激よりも強いからである。（略）では支那を復興するには、どう云ふ手段に出るが好いか？ この問題の解決は、具体的にはどうするにせよ、机上の学説からは生まれる筈がない。

（傍線 引用者）

「墮落」している中国を復興するのは、「机上の学説」では実現できないと章は判断している。「私」はこうした章炳麟の論説を聞きながら、章の書齋に飾っている鰐に注目、「あの鰐はきつと睡蓮の匂と太陽の光と暖な水とを承知してゐるのに相違ない。して見れば現在の私の寒さは、あの鰐に一番通じる筈である。鰐よ、剝製のお前は仕合せだつた。どうか私を憐んでくれ。まだこの通り生きてゐる私を」と考えている。一見すると、章の論説に対して、「私」

は「寒さ」だけを感じたように見えるが、実は、「鱈」と「私」と対比し、古典世界を象徴する「睡蓮の匂と太陽の光と暖な水」の世界と、「今」を示す「寒い」現実との対比を通して、豊かな昔の中国と「墮落」している現実の中国との温度差を語っている。細川正義氏はこの箇所に関して、「語る私のことだけではなく、中国の現状に対する強い共感をうかがわせる」⁽¹⁰⁾と指摘しているように、かつて中国の古典文学に魅了された芥川は、章炳麟の中国の国情に対する論説に共感しながら、右の一節を「上海遊記」に書き留めたのだろう。後年、芥川は章炳麟との会談を思い出し、次のように回想している。

僕は上海のフランス町に章太炎先生を訪問した時、剥製の鱈をぶら下げた書齋に先生と日支の関係を論じた。その時先生の云つた言葉は未だに僕の耳に鳴り渡つてゐる。——「予の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得ない。」先生はまことに賢人である。⁽¹¹⁾

このように、芥川は章炳麟の見解に強く影響されている。大正十三年六月、芥川は反戦小説『桃太郎』を発表した。『桃太郎』の成立は章炳麟の論説及び「上海遊記」に書かれている上海体験の影響抜きには考えられないと思われる。

また、上海で会見した政治家、「大清帝国の遺臣」である鄭孝胥について、「康有為氏を中心とした、芝居のやうな戊戌の変に、花花しい役割を演じた頃には、どの位才気煥発だったか、想像する事も難くはない」と「私」は想像しながら、「氏を加へた我我は、少時支那問題を談じ合つた」。「政治的には、現代の支那に絶望してゐた」鄭孝胥は「支那は共和に執する限り、永久に混乱は免れ得ない。が、王政を行ふとしても、当面の難局を切り抜けるには、英雄の出現を待つばかりである。その英雄も現代では、同時に又利害の錯綜した国際関係に処さなければならぬ。して見れば英雄の出現を待つのは、奇蹟の出現を待つものである」と述べている。このように、鄭孝胥と中国に関する問題を論議しながら、「私」は、

誰でも支那へ行つて見るが好い。必一月とある内には、妙に政治を論じたい気がして来る。(傍線 引用者) あれは現代の支那の空気が、二十年來の政治問題を孕んでゐるからに相違ない。私の如きは御丁寧にも、江南一帯をめぐる間、容易にこの熱がさめなかつた。さうして誰も頼まないのに、芸術なぞよりは数段下等な政治の事ばかり考へてゐた。

というように政治に興味を持つようになった。鄭孝胥は政治的に章炳麟と違う立場に立っているが、二人の「墮落」している中国の現状と改革の難局への認識が一致している。芥川はこの二人の中国の政治の難局への認識や、特に章炳麟の「机上の学説」から中国を復興できないという論説に共感している。

芥川は鄭孝胥を「君子」と賞賛し、また、章炳麟を「賢人」と認めている。しかし、中国の難局を切り抜ける具体的な策を明示していないこの二人を中国の「旧人」の代表として描こうとしている。『大阪毎日新聞』の予告記事に「氏は今筆を載せて上海に在り(略)行々想を自然の風物に寄せると共に、交りを彼の土の新人に結びて、努めて若き支那の面目を観察しようとして居る」¹²⁾とある。芥川は鄭、章の二人に対して、「上海游記」の第十八章に書かれてある政治家李人傑を社会主義者、上海における「若き支那」を代表すべき一人として紹介している。

青柳達雄氏の調査により、李人傑(本名李漢俊)はかつて日本に留学した経験があり、帰国後、新文化とマルクス主義の宣伝に努めていたことがわかった。彼は『マルクス資本論入門』を訳し、『労働会』を創刊し、雑誌『新青年』などの編集にも参加した。また、彼は一九二一(大正十)年七月に開催された中国共産党第一次全国代表大会に出席した結党のメンバーの一人でもある¹³⁾。この「若き支那」を代表する李人傑が「上海游記」において次のように描かれている。

李氏云ふ。現代の支那を如何にすべきか? この問題を解決するものは、共和にあらざる復辟にあらざる。這般の政治革命が、支那の改造に無力なるは、過去既に之を証し、現在亦之を証す。然らば吾人の努力すべきは、社会革

命の一途あるのみと。こは文化運動を宣伝する「若き支那」の思想家が、いづれも呼号する主張なり。李氏又云ふ。社会革命を齎さんとせば、プロバガンダに依らざるべからず。この故に吾人は著述するなり。且覚醒せる支那の士人は、新しき智識に冷淡ならず。否、智識に餓えつつあり。然れどもこの餓を充すべき書籍雜誌に乏しきを如何。予は君に断言す。刻下の急務は著述にありと。或は李氏の言の如くならん。現代の支那には民意なし。民意なくんば革命生ぜず。沉んやその成功をや。李氏又云ふ。種子は手にあり。唯万里の荒蕪、或は力の及ばざらんを惧る。吾人の肉体、この勞に堪ふるや否や、憂ひなきを得ざる所以なりと。言ひ畢つて眉を顰む。予は李氏に同情したり。李氏又云ふ。近時注目すべきものは、支那銀行団の勢力なり。その背後の勢力は問はず、北京政府が支那銀行団に、左右せられんとする傾向あるは、打消し難き事実なるべし。こは必しも悲しむべきにあらず。何となれば吾人の敵は——吾人の砲火を集中すべきは、一銀行団に定まればなりと。(略)李氏の話しは、如何にもきびきびしたものだつた。一しよに行つた村田君が、「あの男は頭が好かもんなあ。」と感嘆したのも不思議ぢやない。

このように、「社会主義者」李人傑は中国の革命運動の困難な状況を述べながら、この難局を切り抜けるのは「社会革命の一途あるのみ」と主張している。また、「現代の支那には民意なし。民意なくんば革命生ぜず」というように革命を成功させるために「民意」の重要性をも強調している。さらに、「刻下の急務は著述にあり」や「吾人の砲火を集中すべきは、一銀行団に定まればなり」など具体的な解決策をも述べている。芥川は、社会革命と民意重視を主張しながら、中国の未来の可能性を語るこの中国の「新人」李人傑にかなり好意を寄せている。後に、大阪毎日新聞社の沢村幸夫宛の書簡にも、「人では章炳麟、鄭孝胥、李経（？）邁等の旧人及余毅民李人傑等の新人に会ひました李人傑と云ふ男は中々秀才です(傍線 引用者)⁽⁴⁾と李を中国の「新人」の代表として認め、「中々秀才です」と賞賛している。では、芥川はなぜ「民意」を重視する李人傑にこのように好意を寄せていたのかを考察してみた

い。

ところで、「李人傑氏」一章の前に「南国の美人」（上・中・下）の章が置かれている。「私」は三馬路にある小有天という酒樓で何人かの南国の美人に出会っている。「古風を存してゐる」芸者時鴻は「自ら琵琶を弾じながら、何だか寂しい唄をうたつた」。「私」は時鴻の歌を聞きながら、「楓葉荻花瑟瑟の秋に、江州の司馬白楽天が、青衫を沾した琵琶の曲は、斯の如きものがあつたかも知れない」というように懐古な気持ちになつている。そして、「布穀催春種」という杜少陵の詩を思い出させる花宝玉の耳に興味を持ち、「西廂記の中の鶯鶯が、『他釵驪玉斜横。髻偏雲乱挽。日高猶自不明眸。暢好是懶懶。半晌擡身。幾回搔耳。一声長歎。』と云ふのも、きつとかう云ふ耳だつたのに相違ない」というように芸者花宝玉を『西廂記』の女主人公のように見つけている。このように、「私」は南国の美人たちをすぐ古典文学と結びつけて眺めようとしている。その後、小有天から出た「私」は別の妓館で再び花宝玉を見かけた。

二十分の後、やや退屈を覚えた私は、部屋の中をあちこち歩いた次手に、そつと次の間を覗いて見た。すると其処の電燈の下には、あの優しい花宝玉が、でつぶり肥つた阿姨と一しよに、晚餐の食卓を囲んでゐた。食卓には皿が二枚しかない。その又一つは菜ばかりである。花宝玉はそれでも熱心に、茶碗と箸とを使つてゐるらしい。私は思はず微笑した。小有天に来てゐた花宝玉は、成程南国の美人かも知れない。しかしこの花宝玉は、——菜根を噛んでゐる花宝玉は、蕩児の玩弄に任すべき美人以上の何物かである。私はこの時支那の女に、初めて女らしい親しみを感じた。

「私」は古典文学の女主人公を髣髴させる花宝玉ではなく、「食卓には皿が二枚しかない」、「菜根を噛んでゐる」庶民的な一面を持つてゐる花宝玉に「支那の女に、初めて女らしい親しみ」を感じている。王書璋氏は「もし、林黛玉が『罪悪と豪奢とが入り交つた』上海を代表してゐるとしたら、『菜根を噛んでゐる』花宝玉は現実の上海を代表し

ていると言える。このように、芥川は着飾った上海ではなく、現実の等身大の人間を混沌の上海の中に見つけ出したかった¹⁰と述べている。芥川は「菜根を噛んでゐる」庶民的な一面を持つ花宝玉を通して、政治の激動と戦乱の背景として上海に一生懸命に生きていた普通の民衆の姿を発見できている。その庶民的な花宝玉に「親しみ」を感じている芥川は「民意」を重視し、民衆の力で社会を変えようとする李人傑の革命思想にかなり共感していると考えられる。故に、民衆の姿を発見した「南国の美人」を意図的に「李人傑氏」の前に置き、そして民意重視の李人傑にかなり好意を寄せていたのであろう。

「私」は文人・政治家との会談を機に、政治や革命運動などにも興味を持つようになった。彼らの中国の現状、革命そして未来に関する見解を聞き、あるいは彼らと論議するうちに、「私」はその認識に強く影響されている。このように、中国を「老大国」として捉えている「私」は普通の民衆に目を向けることや、文人政治家、特に「若き支那」を代表する政治家たちとの会談によって、「上海」を革命の胎動をも強く感じられる都市として再認識している。

四

「上海游記」の最終章「最後の一瞥」で、上海を去る「私」は船に乗って「長椅子によりかかりながら、漫然と回想に耽り出し」ている。

そんな事を思ひ続けながら、私は煙草の箱を出しに、間着のポケットへ手を入れた。が、つかみ出したものは、黄色い埃及の箱ではない、先夜其処に入れ忘れた、支那の芝居の戯単である。と同時に戯単の中から、何かがある。ろりと床へ落ちた。何か、——一瞬間の後、私は素枯れた白蘭花を拾ひ上げてみた。白蘭花はちよいと嗅いで見たが、もう匂さへ残つてゐない。花びらも褐色に変わつてゐる。「白蘭花、白蘭花」——さう云ふ花売りの声を

聞いたのも、何時か追憶に過ぎなくなつた。この花が南国の美人の胸に、匂つてゐるのを眺めたのも、今では夢と同様である。私は手軽な感傷癖に、墮し兼ねない危険を感じながら、素枯れた白蘭花を床へ投げた。さうして巻煙草へ火をつけると、立つ前に小島氏が贈つてくれた、メリイ・ストオプスの本を読み始めた。

「南国の美人の胸に、匂つてゐる」白蘭花が「もう匂さへ残つてゐない」、「花びらも褐色に變つてゐる」。「私」の異国趣味を募らせた「花売りの声」や「白蘭花」が、「何時か追憶に過ぎなくなり」、「今では夢と同様である」となつてゐる。かつて「私」は古典文学と結び付けて中国を理解しようとしていた。詩文にあるような中国の不在に「私」は大失望を感じた。しかし、文人政治家たちとの会談や普通の民衆の発見によつて、「私」はようやく古典小説にあるような上海のみではなく、革命の胎動をも強く感じられる、動きつつある上海をも見出せてゐる。故に、「上海遊記」の最終章において、異国趣味を象徴する「白蘭花」が「もう匂さへ残つてゐない」、「夢と同様である」となつてゐるのであらう。

前述したように、大阪毎日新聞社が求めているのは、「新しき」中国の様子を描く紀行文である。また、芥川自身も「今の支那の偉大」さを探そうとし、新しい中国を見出そうとしていた。芥川が上海に渡つたのは、民族運動がかなり激しかった五四運動の直後の時期である。救国や改革を目指す知識人や政治家らが相次ぎ政党を立ち上げ、革命の気運が高まりつつあった。上海に渡つた芥川はこのような中国の革命の脈拍をも感じ取つてゐる。「上海遊記」において、主人公の「私」と「私」の上海認識の変化を通して、芥川は「新しい上海」を描こうとしていた。

「上海遊記」の主人公「私」は国際都市上海を鋭い目で観察してゐる。租界上海を通して、中国を内憂外患が絶えない「老大国」として再認識してゐる。と同時に、文人政治家との会談を機に、政治や革命運動などにも興味を持つようになつた。彼らの中国の現状、革命そして未来に関する論説を聞き、あるいは彼らと論議しながら、「私」はその認識に強く影響されてゐる。このように、「私」は古典小説にあるような上海や「悪の都会」、「下品な西洋」とし

ての上海のみではなく、革命の胎動をも強く感じられる、動きつつある上海をも発見できている。芥川が見出そうとする「新しい上海」がまさにここに顕在化している。この「新しい上海」像の獲得は転換期にいる芥川にとって、極めて大きな意義を持っている。「上海游记」の創作をはじめ、帰国後の芥川の文学位相そして『將軍』、『桃太郎』、『湖南の扇』など一連の小説の創作にも大きな影響を与えたのである。

※本文はすべて『芥川龍之介全集』（第八巻 岩波書店 平成八年六月）から引用したものである。また、すべての引用は、原則として新字に改め、ルビは省略した。

注

- (1) 『大阪毎日新聞』朝刊（大正十年三月三十一日 一ページ）
- (2) 西村貞吉宛書 大正七年十一月二十日付（『芥川龍之介全集』第十八巻 岩波書店 平成九年四月 二四七―二四八ページ）
- (3) 南部修太郎宛書簡 大正九年五月九日付（『芥川龍之介全集』第十九巻 岩波書店 平成九年六月 五七―五八ページ）
- (4) 薄田泣菫宛書簡 大正十年三月十一日付（『芥川龍之介全集』第十九巻 岩波書店 平成九年六月 一五三ページ）
- (5) 薄田泣菫宛書簡 大正十年六月二日付（『芥川龍之介全集』第十九巻 岩波書店 平成九年六月 一七七ページ）
- (6) 林颯君「芥川龍之介『上海游记』論——（私）の中国観の変化を追って——」（『芥川龍之介研究』第五・六合併号 平成二十四年九月 一六二ページ）
- (7) 芥川龍之介「手帳六」（『芥川龍之介全集』第二十三巻 岩波書店 平成十年一月 三六二ページ）
- (8) 秦剛「『支那游记』における「私」——『文芸的』紀行文の成立と記述者の表現意識をめぐって」（『芥川龍之介研究』第二号 平成二十年八月 二二ページ）
- (9) 関口安義「特派員 芥川龍之介——中国でなにを視たのか」（毎日新聞社 平成九年二月 一一―一二ページ）
- (10) 細川正義「支那游记——大きな転機を与えた中国体験」（『芥川龍之介 生誕一二〇年』関口安義編 翰林書房 平成二十四年十二月 一三四―一三五ページ）
- (11) 芥川龍之介「僻見 岩見重太郎」（『女性改造』第三巻第四号 大正十三年四月 一九五―一九六ページ）

- (12) 『大阪毎日新聞』朝刊（大正十年三月三十一日 一ページ）
- (13) 青柳達雄「李人傑について——芥川龍之介『支那遊記』中の人物」（『言語と文芸』第一〇三号 昭和六十三年九月 五三ページ）
- (14) 沢村幸夫宛書簡 大正十年四月三十日（『芥川龍之介全集』第十九卷 岩波書店 平成九年六月 一六六ページ）
- (15) 王書璋「『上海遊記』のために」（『芥川龍之介と上海』篠崎美生子ほか編 恵泉女学園大学平和文化研究所 平成二十七年三月 四四―四五ページ）

——大学院文学研究科博士課程後期課程——